

「道路政策の質の向上に資する技術研究開発」（令和2年度採択）

事後評価結果（公表用／ソフト分野）

| 番号 | 研究名 | 研究代表者 | 評価 |
|--------|---|------------------|----|
| 2020-3 | バスターミナルを中心としたレジリエントなスマートシティ拠点の機能評価の研究開発 | 広島大学 教授 藤原 章正 | B |

<研究の概要>

主に呉バスタプロジェクトを対象に、災害に強いレジリエントなスマートシティ拠点機能の計測・評価手法の開発を行う。マクロな視点からみた都市間アクセス機能、メゾな視点からみた都市圏交通マネジメント機能、ミクロな視点から見た拠点内移動機能に分けてフィールド実験を通じて検証する。

<事後評価結果>

- ・レジリエントなモビリティハブという時宜を得たテーマであり、十分な成果を挙げている。ただ、評価手法については試論の段階に留まったのではないか。
- ・研究目的に対して一定のレベルには達しているが、研究成果はいずれの項目も実施途上である。
- ・平常時・災害時でのバスタの機能の評価・検証といった当初の目的の達成は一部にとどまる。一方、災害時の交通実態・課題等に関し独自の成果が見られる。
- ・当初目的に沿った、災害に強いスマートシティ拠点を形成するための機能の計測・評価手法の開発と「バスタ」に対する要求機能の解明がなされた。
- ・有益な成果を挙げられており、実務への反映も進められている。
- ・バスタの機能要件が整理されており、実務への活用が比較的容易だと思われる。

このことから、研究目的は概ね達成され、研究成果があったと評価する。

<参考意見>

- ・「(2)スマートシティ拠点・評価手法の開発」は、項目ごとには一定の成果があるが、全体として必ずしも実施内容や着地点が明確になっていないように見受けられる。
- ・レジリエントな「次世代バスタ」の導入戦略立案に向けて、備えるべき機能について提示がなされているが、それらの知見を踏まえた具体的な施設整備方針に結びつけるための方法論や知見の整理が望まれる。
- ・バスタに求められる機能の追加が提案されているが、ずいぶん立派な機能が備わった施設になっており、コストが相当かかるのではないかと思う。また、施設の制約から全ての機能を入れ込むのが難しい場合もあると感じた。
- ・大規模なバスタにおける機能要件は整理されているが、地域のバスタを考えた場合の機能要件の検討が必要である。
- ・研究期間の途中で、「交通拠点の機能強化に関する計画ガイドライン(令和3年4月、国交省道路局)」が策定され各地のバスタ整備事業が進展する中、本研究の目的を、災害時の実態・課題や地域の実情に応じたバスタ整備のためのガイドライン充実等に焦点を向け、成果をとりまとめているれば、道路政策への寄与が明確な成果が得られていた可能性がある。

※本事後評価は、新道路技術会議の各委員が評価を行い、第48回新道路技術会議において審議したものである。